

●地域の農業を牽引する若手農業者として注目される安藤さん。地域農業発展への貢献が評価され、岩見沢市より「令和6年度農業後継者農業奨励表彰」を受けました。



中心メンバーとして活動しています。田藁屋では稲WCSを有効に活用す

新たな挑戦を続け 次代に農業を引き継ぎたい

昨年、安藤さんは新たな輪作物として稲WCS（ホールクroppサイレイジ）の生産を始めました。地元の稲WCS生産組織「田藁屋」の立ち上げにも参加し、

6年前からはキタノカオリの種子生産にも取り組んでいます。種子生産は通常の小麦栽培よりもはるかに手間がかかり、大きな責任も伴いますが、それでも地域が誇る品種を守り続けることが大切だと安藤さんは考えています。

にまで増やしました。規模は4倍以上になりましたが、機械化を進めたことで農作業は安藤さん夫婦と両親の4人でほぼ回り、人手を頼むのはタマネギの定植など、わずかで済んでいるといいます。

安藤さんがタマネギに次いで力を注いでいるのが、岩見沢で開発された「キタノカオリ」という小麦の栽培です。パンにしたときの香りの良さやモチモチとした食感から、近年は特にニーズの高い品種ですが、穂発芽や病気に弱く、栽培が難しいため、生産地はあまり広がらず、ほぼ岩見沢周辺に限られています。

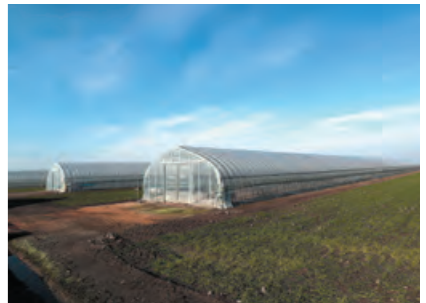
その頃、岩見沢周辺では、タマネギの単作が主流でしたが、安藤さんは大豆を作った後の畑はタマネギの出来が良いことに気づきました。そこで、本格的に輪作に取り組もうと、小麦栽培も開始。タマネギ・小麦・大豆の輪作体系を確立したことによって土壌の質が改善され、タマネギの収穫量は増えていきました。地域の

農業を学び実践する楽しさ 今は希少な小麦栽培も担う

輪作研究会にも参加し、他の生産者の考えや取り組みを知ることで、多くの刺激を受けたといいます。「工夫をして結果を出せば利益もついてくる。農業は奥が深く、面白いと思うようになりました」



●タマネギの育苗用ハウスでは2月初旬に種をまき、4月10日前後には定植を始めるそうです。



●2棟ある倉庫の片方はタマネギの保管専用。新設したばかりの倉庫には、きれいに手入れされたトラクターなどが整然と並べられていました。



●自動操舵システムやビニールハウスの自動開閉システムなど、新しい技術を積極的に取り入れ、農作業の効率化を図っています。



農家の5代目に生まれた安藤さんは、両親が苦勞をする姿を見ていたことから「農業は大変な仕事なのに収入が少なく」と感じていたそうです。外で働いて自立をしようと、一度は建設会社に就職。その後、仕事が休みの日に家業を手伝うようになり、次第に農業に興味を持つようになり、しばらくは会社勤めと家

22歳で農業に専念
タマネギの輪作体系を確立

先進的な取り組みと時代のニーズを捉えた戦略によって、営農の安定化をめざす若い生産者が増えています。岩見沢市でタマネギ栽培を中心に畑作を営む安藤雄介さんもその一人。積極的に挑戦を続ける姿勢から、地域の農業を担う存在として大きな期待を集めています。



●安藤さんは2024年春に、父から安藤農産の代表を引き継ぎました。農業関連の活動にも積極的に参加し、いわみざわ地域ICT農業利活用研究会の役員をはじめ、さまざまな団体の役職を務めています。

先を見据えた戦略で営農の安定化に取り組む若手農業者
農業は奥が深くやりがいのある仕事。
新たな技術や栽培品目を導入し、
次代につながる農業を実現する。

明日を語ろう！
北の農業人

KITANO NOUGYOUBITO



北海道農業に限りない愛情を注ぎ、
たゆまぬ努力を続ける人々がいます。
農業の未来を創造する「北の農業人」の
情熱や取り組みをご紹介します。